真野さよ
枯草の手紙
四季社版
nob.

枯草の手袋

昭和33年9月30日初版発行

著者　真野　さよ

発行者　松本　國雄

印刷製本　中央製本印刷株式会社

発行所　四　季　社

東京都千代田区
神田旅籠町2の6
振替東京 20193
電話 (25) 0995・6380

定価270円

(落丁乱丁の場合は本社にてお取替えいたします。)

一

手袋をあんであげると
約束は萎れないけれど

この国には
ダリアの花束のような毛糸がないので

蓬の茎をほして
編棒をつくつたけれど

野茨の蔓は

かさかさと、すぐきれてしまう

昼は小鳥にきき
夜は夢にたずねて
私は枯草で六十六の手袋をあんだけれど

この村には郵便局がないので

郵便局はあつても
私がおまえのあて名を忘れてしまったので

聖夜の鐘をききながら
私がおまえに贈らない
八十八の、枯草の手袋。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

気をつけたつもりなのに、背後で扉が大きな音をたてて閉まった。

私はぎくりとし、ついで、劇しく乱れ博つ心臓の音をきいた。いや、それは私の体内で、いまはもう、めった打ちに鳴りはじめた警鐘の音にちがいなかった。もはや、猶予はならなかった。私は震える脚をふみしめて、玄関の扉をあとに、柊やつげの植込みの間を走りぬけ、門の石段をかけおりた。そこで一瞬、私は立ちどまり、怖ろしい思いで駅に通じる右手の道に眼をやった。ゆるやかな舗装道路の坂道に人影はなかった。「今だ！」というように、鐘がひときわ狂おしい乱打の調子を昂めた。私は反対の方向に駈けはじめた。住みなれた住宅街の生垣道に、私の眼はもはやなにも見なかった。日昏れにちかい秋風に、追われるように駈けてゆくのは、私の「意志」であった。全身は、燃えている意志の塊以外のなにものでもなかった。

石塀の曲り角にきて、歩調がすこしゆるんだ。ここまでくれば安全であった。同時に、すべては「終り」であった。が、私はふりむくまいと、肩の筋肉をかたくした。とたんに、刺すような悲しみが全身をかけめぐって、眼のさきが昏くなった。私は、もうすこしで、両手の荷物を抛りだして、その場に蹲るところであった。が、「往かねばならない！」と、叱るように、また鳴りひびく鐘の音をきいた。

私は、俯向いてとぼとぼと歩きだした。白い標識をたてたバスの停留所は、そのさきにあった。巾広な舗装道路のカーヴを、かしぎながら危く廻って銀バスが近づいてきた。私はまた駈けて、荒い息づかいのまま数人乗りこんだ乗客のあとに、ようやく間にあった。バスが発車し

て大きく揺れ、私は投げこまれるように座席についた。かなり大きな風呂敷包みと雨傘とハンドバッグを工合よく持ちかえようとして、私は夥しい掌の汗に愕ろいた。バックのなかのハンカチをさぐっていると、ようやく人らしい温みがかえってきたようであった。額の油汗をふきながら、私の眼は、バスの窓ごしにとび去ってゆく肉屋や靴屋や自転車屋のならぶ見馴れた風景を、異様な思いで見送っていた。

私が二度と踏むことのない土地……

私は、家出の途中であった。十五年暮らした家に、夫と二人の子供を置きざりにして、若い男に馳ろうとしていた私は、責める対象が自分より外にはないので、ひどくみじめであった。かなりな時間をかけて、私がこのことのために、ひそかに、しかも周到な準備をしたとはいえ、この暴挙を正当だと人に思わせる理由を私は知らなかったので、うまく逃げ出すことだけが私の目的であった。私は極度に人目を怖れていた。とりわけ、駅の坂道からランドセルをしょって帰ってくる子供達の姿を怖れていた。そのことが、私を平素のコースとは反対に、裏道のバスを選ばせた理由である。

バスの疾走につれて、窓外の風景が陰を深めていった。終点について、省線の駅の広場に私が降り立ったとき、秋の日は、すでにとっぷり昏れていた。広場は雑踏をきわめて、湧くような騒音にみちていた。そのくせ、警笛をつけた自動車も、拡声機のある建物も、バスも都電も群衆も、言いあわせたように、めいめいのわめきを影のなかにかくして、いちように黙々と、

動きまたとまる影絵の舞台のように、私には思えるのだった。暗さが、もの音とものとの関係を不確かにし、そのため、それぞれの叫びや話し声が私に聴きわけられないように、私がいま何を考え、何をしてきたかも彼らは知らないであろう。ものみなの象をあいまいにする夜をこんなにも親しいと私が感じたのは、逃亡者の心であったに違いない。門を出て以来、私ははじめてほっとし、私もまた、大きな包みと傘をさげた影絵のなかの一人物になりきって、駅の構内に入っていった。

こみあって、身動きもできない電車の中でも、これに似た奇妙な錯覚が私につきまとっていた。暗い陸橋の上などで、ふと車体が大きく揺れて乗客がなだれよるようなとき、明るい車内を埋める人々の眼という眼が、非難にみちて私におそいかかるような気がし、私は眼をとじて、倒れまいと踏みとどまることで懸命に彼らに対抗した。かと思うと、電車が明るい街なかを走っているときなど、静かに座席で新聞をよむ男や、吊皮の下に動かぬ横顔をみせた女たちぜんぶが、私と似たりよったりの逃亡者や嘘つきや裏切りものではないかと疑われてきて、あらためてまじまじと彼らの素ぶりに見とれたりするのだった。

電車がいきなり、真昼の廊下に駈けこんだように周囲が明るくなって、新宿駅であった。ここでいったん下車することが私の予定であった。無断で出てきた家に電報をうたねばならなかった。私の足は重かった。それは、今という今も、私を信じて帰りを待っている夫や子供達に、いきなり刃物をつきつけるような残酷な役割を果すことになる。私は自分を憎んでも憎み

たりなかった。

私は、明るい構内の発信所をさけて、わざわざ、危険な車道をいくつも横ぎり、空襲あとの淋しい道を通り、うろ憶えの郵便局に行った。私は、時々重い荷物を持ちかえたり、暗い凸凹道でころびそうになったりしたけれど、すこしも苦痛だとは思わなかった。こんなことこそ、今夜の私に全くふさわしく、彼らがこれからうける苦痛に比べればとるに足りないものに思えた。というより、電報をいっときのばしにしたい魂胆でもあった。が、いっときも延ばしてはならなかった。彼らの不安に少しでも早く終止符をうつことが、今の私にできるせめてもの親切というものであろうから。私は思いきって、郵便局の扉をおした。

内部は閑散としていたので、私は人目に邪魔されずに備えつけの斜卓を独占することができた。しかし、幾通りも考えぬいたはずの電文は、書くはしから気にいらなかった。私は頼信紙を五枚反古にした。「すみませんが、もう一枚……」と、請求するたびに、若い局員は全く機械的な動作で、網籠の中に手をのばして一枚ずつ用紙を渡した。六度めに手をのばした彼は、はじめて眼鏡の奥のきらりと光る眼で私をみた。私はひやりとし、その刹那に電文がきまった。「カエラヌアトフミクミ」窓口からさし出す私の手がひどく震えていた。彼が黙読し、「はい、たしかに。」と無表情に答えたとき、下顎の短い彼の横顔を、私は叫びだしたい憎悪の気持でみつめていた。（私の片棒かつぎ……ひどい男だ！）不意に、眼のまえがくらくらした。と、その男から代金を請求されて、私は二重に愕ろき、慌てて代金を支払った。

暗いでこぼこ道を私は夢中で灯のある街の方へ急いだ。新宿駅の雑沓を前にして、私は再びほっとし、影絵の行列の中にまぎれこむことができた。つぎに私の選んだコースは中央線である。

車内は前にもまして混みあっていた。私が荷物を網棚にのせようとすると、誰か丈高い男の腕が手伝ってくれた。私は素直にその腕に礼をのべた。脱出はほぼ完了しようとしている。あとはM駅でおりるだけ。安堵感からか、私はスーツの内側で、脇の下を流れくだる汗がひどく気になりだした。

玩具のような格子戸に手をかけながら、障子の内側の昏さに、私は一瞬、訝った。

「あ！　待って……すぐだ。」

弾んだ声がして、私が障子をあけると、彼は部屋のまんなかに立って、天井までとどく両手で、電灯を検べていた。眩しい光線が流れて、彼の両手と横顔が裸電球から離れた。私は土間に立ったまま、荷物を畳の上になげだして「きたわ！　つらかった……」というなり顔が歪んだ。私の方にさし出された彼の腕が瞬間ためらった。彼はその場に突ったったまま、不気嫌に横をむいてしまった。私は畳に伏して、声をあげて泣いた。

いっときののち、私が顔をあげると、彼もまた、昏い窓にむかって涙をためていた眼を私にむけ、てれたように微笑みかけた。それから、私達は抱きあった。

「寂しかったんだ……」と、彼が言った。
「ぼくがどんなに待ってたか……ついさっきまで駅に立ってたんだ。だのに、泣きながらくるなんて……いやだ！　うれしいって、とびついてくるんでなくちゃ……」
「むりよ。そんな……」
（これ以外のきかたはできなかった……）
「あたしが、どんなにつらいか……」と、私はまた彼の胸に顔をつけて泣いた。
やがて、今までもよく彼がそうしたように、私の涙をすすって立たせると、私はふしぎと洗われたように快活になる。私は眩しい眼で彼に微笑みながらつぶやいた。
「しかたがないわ、もう……」
私達は、駅前の賑やかな通りで、佃煮や漬物を買って帰り、廊下の小さな流しで米を洗って炊き、おそい夕食をとった。

彼と私が、とうとう一つ屋根の下に住むことになった最初の夜の愛撫がおわったとたんに、また、はげしい悲しみが私を襲った。背中をあわせた彼の安らかな寝息をさまたげないように、私は歯をかみしめて嗚咽にたえた。
怖ろしい夜だ。残酷な晩だ。今ごろ、あの家の茶の間では——夜更けて光度をます電灯の下で、ひとひらの電報を前に、青ざめて動かない夫がみえる。すでに、あちこちの心あたりに電

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

話がかけられ、どこからも手がかりは得られず、訝りと、怒りと、怨みと憎しみの底から、なお信じられないなにかが、朝まで彼をまんじりともさせないに違いない。そうして、子供たち……と思うとき、私はほとんど体中から血の噴くような苦痛をおぼえるのだった。私の想像は、そこからさきへは決してゆかない。ただ、新らしい涙がどっとあふれて、私は寝巻の袂をちぎれるほど嚙み、口のなかにおしいれて、声を出すまいとひっしの格闘をするばかりだった。

私は、こうした大手術をいつかはしなければならないと、かくごはしていたつもりが、今となっては、メスを揮った自分の手の痛さに、ほとんど叫びだしそうなのだ。しかし、ゆかねばならない！　もう、ふりかえることはならないのだ。

夜更けて風が出てきた。武蔵野のはてのきびしい風は、すぎるたび、この小さな家をゆすって、板戸を不気味に鳴らしていた。いくどか、寝がえりをうった彼が、夢うつつのなかに私をさぐっては肩をかきよせた。彼と、子供と、この二つの異った比重はついに私をひき裂いてしまった。あちらに置いてきたもの、あれは私の肉の半分なのだ。コドモと名のつく私そのものなのだ。彼にはそれがわからないのだ。この烈しい恋人には。

とても眠れないと思ったその夜を、彼の腕のなかでめざめてみると、それでも、暁方ちかくまどろんだにちがいない。その時間だけ去っていた苦痛がどっと襲いかかるような、いやな眼ざめであった。再び、私はさいなまされはじめていた。たしかに、やがてあの家にも不幸な朝がくるだろう。多分、夫は焦悴し、多分子供たちはしゃくりあげて泣くだろう……こんな酷い

夜にも、不貞ないとなみを重ね、眠りをとったことで私は自分をかぎりなく責めていた。（眠るとは……人を不幸につき落した晩に……ひどい、卑怯な、無神経な、宥せない私……）

しかし、この時不意に、耳もとで規則正しい彼の寝息と、首にまかれた腕の体温を意識すると、私はにわかに、自分の新らしい境遇を信じないでいられないことに気づいた。すでに、ここにきてしまった私に、もはや湿っぽい自虐は、無意味で滑稽なのだ。もっと酷くなれ！　もっと無神経になれ！　私は唇を嚙んで自分をけしかけていた。

彼はよく寝入っていた。枕から斜めに頭をずらし、うすら明りのなかに頤を心もちそらせた安穏な寝姿ながら、片腕はひと晩中、夢うつつにも私の肩をとらえて放さない。人の妻、子の母を奪って、すやすやと熟睡する彼に、私は羨望と賛嘆と憎悪の入りまじった不思議な思いを抱いた。が、まもなく障子から明けてきた朝の光に、うすっぺらな天井が、瘠せた柱が、粗悪な壁がつぎつぎにみすぼらしい部屋の全貌をあらわし、釘にさがったくたびれたズボンが私の眼に映ったとき、彼への思いがひどくいとしいものになって還ってくるのだった。今日のために、私たちは五年の歳月をかけている。私のために彼はどんなこともしてきた。貧しい部屋、素朴な生活、私たちに今日から新らしい日が始まる……

私はいきなり彼を揺すって、湿っぽい額の髪をかきあげながら、彼に接吻けた。私の眼の下で、反った睫がはね上り、さだかならぬ瞳が現われ、たちまち狂喜の光がきらめき出るのを、私は確かな証しのように見まもっていた。暫らく、彼は私を放さなかった。「くみがいた、く

みがいた、くみがいた……」幼児のうたのように、彼は私の耳もとで小さくくりかえしていた。

慌しく勤めに出なければならない彼に、私はネクタイを渡し、上衣をかけ、ハンカチを渡し、また後に廻り、背のびしてブラシをあてた。聳えるような肩の厚みが、いとしさになって指に響いた。「くみ、くみ、くみ……」彼は意味もなく、こごえで名を呼びつづける。なんどでも接吻けをする。「心配だなあ……」と、しぶる彼を私は小さな格子にもたれて見送った。

「とにかく待っててくれなくっちゃ……いいね！　きっとだよ。いやだな……こんな日に出てくなんて……」

私は黙って頷いた。もはや、待つ以外にはない私。心を決めて出てきた重さを彼はどう受けとっているのだろうと、念をおす彼が不思議なくらいだ。振りかえり振りかえり、彼が出てゆくと、私は見知らぬ部屋にぽつんと残った。どっと、また苦痛がおいかぶさってきた。

「えい子！　陽！」

私は置いてきた自分の肉の半分の名を呼んだ。涙がぼうぼうと流れる以外に術はない。こうして、私の新らしい日が始まった。

貧しい四畳半だ。彼の本棚と机、一隅にさん然と金具の光るいかめしい大型のトランク、これだけが彼の前身を証(あか)して、あとは全くなにもない見事に簡素な部屋である。いびつな薄い襖を隔てて右隣りは、家主夫婦の部屋ときいていた。朝方、ぼそぼそときこえた話声もひっそり

とやんでいた。左側の壁でしきられた隣りには、勤人と学生の兄弟がいると彼が教えた。朝早く、鼻唄と、格子の乱暴なあけたてをきいたきりだ。つき当りの襖をあけると、玩具のような炊事場があって、その窓から手をのばすと、隣家の軒をひっぱることもできる。踏めば傾きそうな炊事場の板間をおりると、どろどろのぬかるみを通って、私は井戸端で水を汲んだ。なれないポンプの重さに、体いっぱいの力をかけると、どっと水が溢れて、スカートを濡らした。(馴れないせいよ。)私は自分に言いわけをした。ふと、子供の声にふりむくと、隣家の窓に幼いおかっぱと坊主頭がならんで眼をみはっていた。「あっ!」と、刺すようなものが全身を貫いて、私は部屋にかけこみ、襖をしめた。しばらく、動悸がおさまらなかった。(馴れなければ……)私は呟き、眼をつぶって、歯をかみしめた。

それから、私は、何度か格子の音や下駄の音や話声を耳にして、立ったり坐ったりした。が、どれも隣家や、そのまた隣家の物音なのだ。私の生活の距離感は、すっかり建てなおさねばならない。この住居の底なしの恐怖に、まずむかわねばならないのだ。(いまに、馴れる……)私は、また自分に言いきかせた。

また、物音も声も素通しの環境のなかに持ちこんだ昨夜からの私達の生活を恥といえば、それは体中を火にしてみても、なお足りないほどのものだ。しかし、(私はもう人ではない。)恥をのりこえ、優しさを、誠実を踏みにじってゆく鬼の道。私は、心の指で、劇薬の瓶をにぎりしめてみる。と、奇妙に心がしんと澄んで、もう、この世に怖ろしいものはなにもない、と思

ありたけの勇気をふるい起こして、私は、その午前中かかって、夫あての手紙を書いた。

「このことは、永い間、ひとりで考えぬいたことなので、今となっては、もう、どう思いかえすこともできないのです。

私は、あなたのところにこれ以上いてはならないのです。私の将来が幸福にむいているなど、私さえ思ってはおりません。ぜんぶ、私の罪と、私のわがままです。どんなにお怒りになっても、ひとことの弁解もできません。黙って決行することは全く卑劣ですが、私にはこうするより仕方がないのです。子供たちのことは、つらくて口にもできませんが、とにかくよろしくお願いいたします……」

というような意味の、くどくどと、纏らない手紙を読みかえしながら、私は、自分の言葉の手前勝手に呆れた。しかし、どうせよというのだ。いまとなっては、その手前勝手だけが私の歩き方の、唯一つの方途ではないか。

私が窓の外に眼をむけると、私の坐っている部屋は、草の生い繁った空地にまむかっているのだった。萩や芒や、鉄道草のすそに、野茨がまつわりついたり、笹が這ったりしながら、すべては青いなりに黄色いなりに、秋の色が深い。空地のつづきには雑木林があって、葉のすけた梢の彼方には、塗りつけたようなコバルトブルーの空がある。その空のつづきには、私が昨日まで生きてきた生活が、今日はどんな悲惨ないとなみをくりかえしていることか……

私は思い切って、夫のあて名を書くと、草原のわきの路を通り、小さな町の郵便局で、それを速達にたのんだ。いよいよ、これでおわるのだ。この青い空の下、暴虐な手紙は、何くわぬ顔で、数々の、愛をつげる、或はあいさつの、或は取引の便りにまじって、人や自転車のいきかう街を、赤いトラックで運ばれてゆくのだろうか。（ひどい！）わっと泣きだしたいのを怺えて、私は駈けて帰った。小さな部屋にあかあかと陽がさして、短かい秋の午後さえ、今日の私にはながすぎる。

日が昏れて、せかせかと、高い靴音をひびかせて帰ってきた彼は、私をみるなり、大げさな安堵の色をみせて、上り口にへたりこんでしまった。

「ああ、よかった！　きみがいなくなってやしないかと思って、脚が震えちゃった。心臓かこんなだ、ほら……」

「まさか……」

（いくところもない私、帰れるはずもない私……）と、私は自分の笑い声の寂しさをうすら寒く思い、それにしても、彼の心配の素朴さをうれしく思うのだ。人は嗤うかもしれない。しかし、私がいつもてもなく負けてしまうのはこういう彼なのだ。彼に手をとられて、私の掌が聴きいる彼の心臓は、ワイシャツの上からも熱く、どっく、どっくと、紅い血の高鳴りをつたえていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo